
それが僕らの異世界譚

尾柄佑亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それが僕らの異世界譚

【Nコード】

N3037Z

【作者名】

尾柄佑亮

【あらすじ】

ある出来事をきっかけに彼らは世界から飛ばされる。そして行き着いた先は……異世界だった！そこでは彼らは勇者と呼ばれ……
過去と向き合いながら彼らは新たな世界で戦っていく……そんな話です。

注意：この物語は基本主人公チートです。苦手な方はご遠慮ください。

過去（前書き）

初長編です！

よろしくお願ひしますm（
）m

過去

その日、僕らはいつもの様に2人で下校していた。

「ねえ彩音ちゃん、うちのたんじんの先生って帰りの会がながすぎ
ると思わない？今日だってもう他のクラスの子はみんな帰っちゃっ
てるしさあ。」

僕はるのけんいち春野健一はそう言っ
て一緒に並んで歩いている女の子か笠
原彩音さきはらあやねちゃんに声をかけた。

「確かにそうだよね……でももうあきらめるしかないよ。だって私
たちが4年生になってからもう2ヶ月だけど、その間ずっとだよ？」

「……そうだったね。でもやっぱりはやく帰りたいなあ……」

「そ、それに良いことだってあるよー！」

「良いことって？」

「そ、それは……」

それから彩音ちゃんは少し考え込んだ後、意を決したかのような
顔をして、でも小さな声でこう言った。

「良いことって……ケ……ケンくんといつも一緒に帰れること……
とか。」

……それを聞いた僕は嬉しさやら恥ずかしさやらで顔が沸騰しそ
うなくらい熱くなってしまい、

「え、あ、え〜っと……」

何も言えなくなってしまうた。

すると彩音ちゃんの方も黙ってしまい、しばらくの間沈黙が続い
た。

僕の心臓がとてもうるさく鳴っていて、彩音ちゃんに聞かれてな
いか不安だった。

そしてそのまま家に帰る……はずだった。

しかしその日、僕らの日常に異変が起こった。

「そこのお嬢ちゃん、一緒に楽しい所に遊びに行かないかい？」

あと5分ほど歩けば家に帰れる、というところで――（ちなみに僕と彩音ちゃんの家は向かいにある）変な男が声をかけてきた。

そいつは太っていて額に脂ぎった汗をかき、走ってもいないのにハアハア言いながら気持ちの悪い笑みを浮かべていた。

「…………おじさん、誰？」

彩音ちゃんは男を警戒しながらそう尋ねた。

「おじさんは……………実はサンタさんに頼まれて良い子のキミを迎えに来たんだ。」

男はニヤニヤしながら答えた。

その普通ではない態度の男を見て彩音ちゃんは怯えてしまい、男から隠れる様に僕の後ろに移動した。

「オジサン、今は夏だからサンタさんは日本にはいないんじゃないの？」

僕は勇気を振り絞って男に言い返した。

「なんだよガキが……………外国ではサンタが夏に来る国もあるんだよ。」

話す相手が彩音ちゃんじゃなく僕になった瞬間、男の口調が変わった。

「あんまり言いたくなかったけど……」

サンタさんが本当はいないことくらい僕知ってるよ？

だって去年のイブの夜部屋のドアが開く音がしたから、サンタさんが来てくれた、と思って少しだけ目を開けたら、そこにはサンタさんじゃなくてお父さんとお母さんがいたもん。」

「えっ、そうなの!？」

僕が喋り終えた直後、彩音ちゃんがビククリした様子で僕の方を見ていた。

「……ああ、やっぱり彩音ちゃんは知らなかったのか……と僕は少し言ってしまったことを後悔した。」

「チツ、ガキが……それはだな……」

「……ああもう面倒だ!とにかく嬢ちゃん一緒に来てもらおうか!」

そう言っただけで脂ぎった汗まみれの右手を彩音ちゃんに伸ばそうとした。

「おいやめろ!彩音ちゃんに触るな!」

僕は咄嗟に男の右手を全力で掴んだ。

「くそっ、このガキが。さっきから俺の邪魔ばっかしやがって。お前に用はねえんだよ」

そう言いながら男は全力で右腕を振ってきた。僕はその力に耐えられず手を離してしまい尻餅をついた。

「おいガキ。お前ウザすぎるから消えな。」

男はそう言つと、ポケットから刃渡り5cmほどのナイフを取り出した。

「さあ、殺してやる。」

その言葉を聞いた瞬間、目前に迫った死の恐怖により体が震え始め、一歩も動くことができなくなった。

「あ、ああ……」

もはや声を出すこともままならない。

「そんじゃあ、サヨナラだ！」

ナイフが僕に迫ってくる。男の顔を見ると、全力で僕を殺そうとしている。なのにナイフはゆっくりと動いている。

・・・そうか、死ぬ直前と言うのは本当に時間を遅く感じるんだな。なら僕は死ぬのか。

やだな、まだいろいろやりたいことがあったのに。お酒を飲んだ事もないし、恋人が出来た事もないし……

やっぱりまだ死にたくない！死にたくないよ！

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。誰か助け……

……

「ケンくん危ない!!」

僕はなにかに突き飛ばされた。そして……

グシャッ

ナイフが何かを突き刺した音が辺りを支配した。

僕は自分が刺されたかと思ったが、自分の体を見ても怪我はない。

「おい、なんでお前が来る……くそっ、せつかくの上玉を逃しちまった。」

自分に怪我がないのを確認したのと同時にそんな男の声がした。

僕はなにが起こっているのか分からず振り向いて見るとそこには

……

左胸にナイフが突き刺さった彩音ちゃんが赤黒い液体を流しながら倒れている姿があった。

「彩音ちゃん!」

その姿を見て僕は頭が真っ白になり、急いで彩音ちゃんに駆け寄った。

「彩音ちゃん、彩音ちゃん!どうして!」

僕が必死に、何度も何度も声をかけた。すると、

「ケ……ケン、くん……?」

彩音ちゃんが声を発した。

「良かった!彩音ちゃん、生きていたんだね!今すぐ救急車呼んでく……待って」

僕の言葉は彩音ちゃんの言葉に遮られた。

「……待って。一人にしないで。」

「でも……」

「私の事なんかより……ケンくんは無事だっ………たんだ………ね。良かった。」

「今はそれどころじゃないよ!」

僕はかなり焦った。早く救急車を呼ばないと彩音ちゃんは確実に

死んでしまおうと思ったから。

「……ねえ聞いて……て？」

しかし彩音ちゃんは急ごうとはしない。自分が死にそうなのに。

「あの……ね、ケンくん……わたし……前から言いた……かった事……あるん……だ……」

実はわ……たしず……っと前からずっとケンくんのこと好……好きだっ……たんだ……だから……付き……合……つてく……れませ……んか？」

急に彩音ちゃんに告白された。そんな状況じゃないにもかかわらず。それはまるで、己の死を悟っている様だった。

「僕も……僕も好きだよ、彩音ちゃんの事が。だから……死なないで！」

僕は必死に言葉を紡いだ。

不覚にも彩音ちゃんの告白を聞けた時に自分の恋心に気づいた僕は、急に彼女を愛おしく感じるようになった。

「なんだ……両想いだ……ったんだ……ならもっと早く告白すれ……ば良かったな……」
「ねえケンくん……少しだけ……顔を……近づけて……？」

「……わかったよ。……これでい……！？」

なぜかこのお願いを断つてはいけない気がした僕は、彩音ちゃんに言われた通りに彩音ちゃんに顔を近づけた。

するとその瞬間、僕の唇に柔らかくて気持ちの良いものが触れた。僕はあまりに急な出来事に何が起きたのか理解するのに時間がかかった。

「へへ……わた……しのファー……ストキス……ケンくんにあげち……やった……」

「……僕も初めてだよ。……いっしょだね。」

「そっか……うれしいな……
……あれ……なんだかケンく……んとキスでき……て安心したせいか……寒くな……ってきた……」

途端に彼女は震え始めた。

「あれ……おかしいな……今は6月なの……に……す……く寒くな……って……」

「しっかりして！今救急車を！」

「今は6月……だか……ら次は7月か……そうだ……夏休……みに……なった……ら一緒に海……に行こ……うよ……で冬にな……ったら……一緒に初詣……に行こ……う」

「わかった、わかったから頑張っ生きてー!!」

「あれ……どんど……ん寒く……なっ……行く……よ……？」
寒い……寒いよ……」

そう言って手を僕の方へ持ってきた。かなり不安だっが僕は彼女の手を握った。

「ケン……くんの手……あったかい……
でも……寒い……寒い……寒いよ……」

そう言っ彩音ちゃんに対して僕はただ強く手を握り締める事しか出来なかつた。

そして……

「寒い……よケンく……ん……寒い……
ケンくん……助けて……
ね……えケ……ん……くん……た……す……け……」

その言葉を最後に彼女の全身から力が抜け落ちていった……

「う、嘘だよね……嘘って言うてよ……
ねえ彩音ちゃん？彩音ちゃんああああああああああああああああ
あん」

呼び出し

あれから6年がたった。

あの事件の後、自分にもっと力があれば……と自分を恨んだ。自分を憎んだ。

もちろんあの男を憎んでもいたがそれ以上にだ。

それからしばらくは、とても酷い状態だった。毎日毎日後悔ばかりしていた。

だが今では落ち着いている。

無論、彼女のことを忘れる事はできそうにない。

でももう同じ思いはしたくない。そう心に誓い、ある時から体をひたすら鍛え続けてている。いつか護りたいものが出来た時に護れるように……

しかし僕がこんなに前向きになれたのはある1人の……親友との出会いによるもの大きい。

それは中学1年のとある4月の日の事だった。

当時まだ彼女の事を引きずっていた僕は、自分でもわかるほど暗

い表情をしながら日々を過ごしていた。

そんな僕に近寄って来る物好きは誰もいなかった。

あの日までは……

その日も僕は、何をするわけでもなく、ただずっと外を眺めていた。

……学校面白くないなあ、早く帰りたいなあ……
そう思いながら。

すると突然肩を叩かれた。

僕は驚いて振り向いてみるとそこにはきりつとした顔立ちに168cmくらいの身長、そして制服を少し着崩している……いわゆるイケメンが微笑みながら立っていた。

そして彼は僕が振り向いたのを確認するところ言った。

「お前入学してからずっと暗い顔してるよな。

なあ、せっかく中学生に成ったんだろ？ならもっと楽しい顔してさ、青春を謳歌しようぜ！！」

それが僕と親友しまつきしんじ島崎真司しんじとの出会いだった。

それ以来僕の世界は変わった。

なぜかいつも真司が僕と行動を共にするようになった。

始めは正直鬱陶しかったが、それでも真司と一緒にいる時は楽しかった。

そして、当時の僕とは正反対でもとても明るく前向きな真司を見ると、後悔ばかりしてはいけけない、そう思うようになった。体を鍛え始めたのもこの頃からだ。

そして真司と一緒に高校に進んだ。

真司はあれからさらに身長が伸び、今では176cmほどもある。足も長い。

……正直イケメン過ぎて嫉妬している。

それに対して僕は四捨五入すると170cmに何とか届く……そんな身長に平々凡々の容姿。

どう考えても真司の引き立て役にしか成っていない……

そんなこんなで今に至る。

さて、何で辛い過去までわざわざ回想していたのかと言いつつ……

今朝投稿したら靴箱に、ハートのシールで封がしてある、ラブレターにしか見えない手紙が入っていた！！

それを見て僕は、だいぶ変わることが出来たんだなあ……と思い
回想していたわけだ。

「どうした健一……っってお前それラブレターじゃねえか！
そうか……遂に健一もラブレターをもらう年頃になったのか……
時が立つのは早いな。」

「お前は僕の親父か。」
思わずつつこんだ。

「まあそう言うなって。
……で、なんて書いてあったんだ？」

「うん、ちょっと待って。」

そう言って僕は手紙を開いてみた。するとそこには……

『伝えたいことがあります。もしよろしければ放課後屋上まで来て
ください。』

そう書いてあった。

放課後、僕は真司と一緒に屋上へ出る扉の前に来ていた。

「おい健一、お前いつまでそわそわしてるつもりだよ。もうすぐ手紙の子に会うんだろ？もっとシャキツとしろよシャキツと。」

「そう言われても緊張してどうしようも無いんだよ。」

僕はつい弱気なことを口にしてしまった。

「なら一緒にいって行ってやろうか？」

「大丈夫だよ！……というか真司が来たいただけなんじゃ……？」

「……ん、んなことねえって。」

まあ一発かましてこい！

「今の間はなに？それにかますって何を……」

「そんなことは気にすんなって！」

「……もう良いよ。じゃあ行ってくる。」

まったく……真司は何を考えてんだろ？

ただただそう思いつつ扉の前に立ち、思いつきり扉を押した！！

しかし扉は開かない……

僕は焦って何度も扉を押した。しかしびくともしない。

「おい健……そ、その扉は押すんじゃないよ。引くんだよ。」

するとそんな笑いをこらえたような真司の声が聞こえてきた。

僕は真司の今の様子を想像すると、後ろを振り向けなかった。

屋上に出るとそこには誰もいない。

……あれ……まだ来てないのかなあ？……

なんてことを思っていたら、

「やっと来てくださいましたか。我らが救世主ケンイチ様」
なんて声がしてきた。

「え……誰か居るんですか？」

正直誰も居る気配なんてしない。こ、怖い。

「じじに居ります。」

するとそんな声と共に目の前に黒い猫が現れた。

……猫？

「もしかして、君が話しかけているの？」

恐る恐る僕はその黒猫に尋ねた。

いや、流石にそれはないよね……ははは、遂に頭がおかしくなっ
てき」「はい」

……え？

「正確にはこの生物を媒介として話をさせて頂いております。」

「……」

気が動転していて何も言えない。

「救世主様。いえ、勇者ケンイチ様。どうか私共の世界へ来て下さらないでしょうか」

「……はい？」

「ごめんなさい何の事が全ぜ」「ありがとうございます！では早速転送致します！」

え？僕良いなんて言ったっけ？

というか転送って……何？

「では転送を開始します！」

その声とともに僕の上空に巨大な魔方陣が浮かび上がりそのまま僕を呑み込まんとばかりにゆっくりと降りてきた。

……ヤバい、逃げないと……

そう思い僕は逃げようとした。

「おい健一、危ない！！」

……しかし僕を庇おうと突っ込んできた真司に捕まり、やがて僕ら2人は魔方陣に呑み込まれた。

呼び出し（後書き）

m これから不定期更新となりますが、よろしくお願ひします m（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3037z/>

それが僕らの異世界譚

2011年12月11日18時51分発行